芭蕉翁終焉記

全

へ 5
1830

芭蕉翁終焉記

それやかれ春色のうしろきまた風に渇り
てしらし泉石冷たくて蕉網緑の地は風ろ
濕氣にしみて梅も柔もまたれもいと津来たり
秋は嵯峨かなしむと深く膳をくれむとより
なり同じもかくとなりてや雪れの尾
これを無常因算のおくりさ人後
なく立帰て今年旅中老衰なりと歎
かくて抱し翁孤獨を安穩なりして徳業にせ

へ5

絶百こ計量なり[illegible]人の門ふ[illegible]をひ
こゝ合作を百同と縁との石可思議い
ふ也も神能〳〵かゝ〳〵天和二年九月深川の
芋菴を[illegible]れ潮にひゝり[illegible]をかゝき
て煙のゝふ生のひゝん是そ[illegible]法のえゝき
初人[illegible]拉[illegible]の愛と恨ゝ[illegible]位[illegible]
[illegible]年[illegible]の[illegible]根
[illegible]二の雪のゝ[illegible]
[illegible]入無我と[illegible]昔乃

[illegible]立[illegible]れか人〳〵[illegible]れ
焼原[illegible]舊竹ふ[illegible]
[illegible]一株の芭蕉を植ゝ雨
中の[illegible]芭蕉を分て盥に雨[illegible]夜
[illegible]に[illegible]閑の友[illegible]
[illegible]芭蕉[illegible]
ぬ[illegible]円覺寺大巓和尚と中ゝ[illegible]
[illegible]
或時[illegible]年月

時日を古歌に[illegible]筆せしめたる
華とかの武ふあるべき足に一かたの詩
の風ふ吹き[illegible]てうきてすの数
しらずくぬぎも命たきれくか
らして世ふあるべきあらたまりされで
ひつかはるべきて[illegible]清かんとすれも
うるさうるさうるさうるたてこころさを
やまんまきなりや信ふ聖典乃
理を感しうるさ[illegible]今朱

[illegible]の[illegible]を[illegible]
ふも感もれい所[illegible]れ橋あり舟有
林あり塔あり[illegible]の[illegible]上弾[illegible]
浅草と賑[illegible]の奇景も拾かく
名せあて思ふもはよれ紅れと古
ふいさう思ふ[illegible]るありとて貞享初
のさしの秋知利をとるし大和路
やより弾の[illegible]のこと[illegible]
こころうたうさ世をうやはより

人の見ぬれたる際の物ゝ様ひの来るを
なんいう様しまき音やいうまと風和
てこゝろゝるゝの三ゝ多ゝ鄙の長路
をいくゝゝ人ゝ名を元白を思ふと
あゝゝ行きこゝゝふ慣れるゝ旅を
作所ふ作ゝるこゝれと風の吟所ふ物
ゝ徳化ゝて西国の師ゝ作きゝゝ迎
立陣々より馬とゝせて乗りむゝふ
せんゝ寺ゝふをのゝ発てゝ思ふ一日も

寺ゝりれふ氣ふゝふ裏感ゝて
風ゝ原の行国ふれゝて後来れ
ゝゝゝゝ寺年ゝり大津若所の
人ゝ以ゝ源ゝ幼伯菴（懐義集ニ記あり）義仲
寺ゝ所ゝ所ゝ風系をゝの物ふ
て遊ゝて年有え来混乱寺仏頂和
尚ふ嗣法ゝてひゝゝ宗禅の法ゝと云
ゝ一氣鉄鑄生（ナス）いきてゝ有ゝれも
老ゝ所ゝ所ゝて句毎の口ゝ

其風姿をみても自然に山家集の骨髄
をうつし得て有かたくやさしけれはこそ秋
道の杜子美也とはもてはやして貧交
の人に厚く喫茶の會盟におなしくも
宗鑑か酒旅も数のひとつにて盛く自由狂
放狂体世挙て口うつしせしも現力なり
孔篤實のちからは風雅の妙花に匂ひ
月にかゝやき柳に流れ雪に光毎之留
須广明石の夜泊渉路係の明れ

杖を引くをしきめくりきをかけて
能因木曽路に兼好二見に西行高野に
寂蓮越路の縁は宗祇宗長白川に
兼載の草庵は津きりし故人なりけり
芭蕉翁に随ひてまはりにて人之いさや
しるとさそはれける折柄の空もたのみ
くや奥の細道といふ所に有十餘年からく杖と笠と攻殺
されて十日も止る所にては又こそ我か帽れ
しらを道祖神のさいかしねかみなりと

[illegible]なり郷なる[illegible]や亜巨燵
是ハ道祖神尚の[illegible]世ふる[illegible]
て[illegible]中ゆめを[illegible]
とよせ[illegible]に思ひ[illegible]
遊子う一生[illegible]
生涯を[illegible]
の菴を又立出[illegible]
を帰人も流[illegible]
[illegible]

[illegible]
こ[illegible]
心[illegible]人[illegible]
[illegible]
て思ひ[illegible]
九月廿五日[illegible]の曲[illegible]
[illegible]
人[illegible]
[illegible]

二ヶ月の紀行

[illegible]
堤積(リツセキ)[illegible]
[illegible]
[illegible]月晦日の夜より床ふたれ泄瀉
[illegible]して物いふ力もなく[illegible]
ぬきはあるやうにて[illegible]人の中
小も[illegible]より[illegible]
大[illegible]より本節[illegible]
[illegible]添て与考惟[illegible]

[illegible]やうにも心神の勢
なりにしが石海とをりて人を過く
も拍[illegible]
[illegible]を[illegible]
年[illegible]入[illegible]
[illegible]
張[illegible]病[illegible]
又拍[illegible]
[illegible]

上京五十年の道程切て思ふて悔
きし八月の夜の吟こゝろ安く覚て
笑會形骸の句

落葉きゝやかゝる時雨哉　木節
風乃空ふ雲や在所　去来
足ゝ行の村やさゝる　惟然
初雪にもそゝ[illegible]　正秀
神の留る頼ゝ力やわの風　之道
居上てはさゝ[illegible]　伽香

起さるゝ者もうれしき湯婆（タンポ）　文考
乃仙や使にはまて床離れ　呑舟
清秋の野のさなりや徳競　丈竹
日に増てゝ[illegible]　乙列
是ゝ生涯乃笑ひ羽ゝ木節ゝ葉ゝ[illegible]
[illegible]たのゝ[illegible]
[illegible]ゝ汚を[illegible]
[illegible]
有なゝ切にゝ[illegible]

彼門人等の後を追て発て公地
の使とゝまれるも孤に乗て
帰にたゝるまゝ帰ひなるゝ心
のきまれたるけしとなれ心よりなること
日ゝや名ゝえひに麻の衣の垢つき
たる袋根をよ紀衣に脱かえ一番衣
落れくやて袖乃めてゝ紀をゝ
のたゝゝ門葉のまれもの雨月九日十日
八ゝたるゝけちゝに其角松尾の府

海に播州明石にたゝ伊勢七郎
小寿ゝれあ新ふなんりふて思出れ
たるたゝゝやゝ無ゝめて逢ゝ
しれたひぬ市八岩谷竜谷一ツ乗ぬ
あれの南ふゝ伊て坂ふゝ十日の夕へ
大坂ふゝて伊ふなゝ海のり乗ゝ
このゝりゝめゝたりふゝれ八新なゝ
やゝ仕に腹ゝ紀ゝ名ゝけて病床子
何ひ愛いるゝなき憶(オモヒ)をの力なき老乃

何とかゝるたより先年此の所き志に通し
て仏事神のしるしなるやうに新発田和
尚の庫裏にも祈祷をいたす有為
なる世のよろこび嬉遊の明神の物と吹聲
とゝのゝ覚へ行こに祠せき上て
うれしきより所を去来を先かゝるに
中〇〇所に近て安藤の心と中先より
膝をゆるめて病気をうたいたゞかなな
くて知死期をも定めたりゝたに

吹井より出るかんぬき　晋子

ゝれ出しゝ方のゝゝめるゝゝより　先なのも
新発田も有ゝ宮ゝ幻住庵ゝ新世ふ
をし五雷角と塚を並ゝと有
たゝれも法ゝ自ふ来ぬ新
ものきゝゝゝの　中月の所と新ゝたき
ぶゝ常にゝゝゝき白ものゝるとぜん
表と思ハゝさに傾城のものもの
ゝゝを作り所ゝに新ゝ芭蕉の

たゝ[illegible]に伽[illegible]の[illegible]
中に

[illegible]薩[illegible]の[illegible]　大州
病中[illegible]あり[illegible]　玄来
[illegible]　惟然
[illegible]　支考
[illegible]　正秀
[illegible]　木節
[illegible]　七別

十二日の申刻計に死[illegible]
ると[illegible]物[illegible]
小[illegible]人の用[illegible]
に[illegible]の世[illegible]別大州与考帳[illegible]
木節春[illegible]寿貞[illegible]
[illegible]
[illegible]
ひ[illegible]
[illegible]

光をかゝやかす異しきのゝ人の
名のミ墓へる昔物語と今見に立る事
西北に拓れて住の地を定めさる所の
名や奥松島瑞巌の白山をぬきて
ふて彩もかゝはせて鶯くゆの歌き
なるんに一夜もそひてかゝるの風を
ゆるしたまふ事なり世の人あるねい
人の異ひゆくさやかにさも待を
うゝ伏見に住ゆゝより義経

ふ稱して葬禮義経をし京大坂大
津堺所の連元檀家者ども皆の情を
墓へたこゝ寺ゝ
三百俗人浄衣その形初月と七月の素
ぬひたゝ義せ世別義経家直愚
十人ばかりひきて門のゝ川
入る所ふかゝ書塚の右ふ並
色て古られを墓ゝ
たる様もいりゝ墓のちきり

なくなりて後に卵塔をたてゝ元あり
塔を高く結ばれたる結をうつし名
かゝることに常に風雨を好める二時有
ぎにも不ぬるゝ山田上山をかゝて
さゝぼも寄ぬ不ぬ世間出家ふ
歌念の仏をぼし雄路の鹿田家の
雁遺骨を湖上の月に送ぬ仮初
なりぬ為也人々七日ゝ行てゆりて行
まて小退ぬ無仏幸に拝あ遠ぬ

[illegible]人々のなみき浅合瀬し
て思ふ紙幕の紙を殘し行るゆり
ほもそゝけき風れ仏をかわり為浅
志のゝ人学ぶを思て回れたりと
事〳〵

於栗津義仲寺牌位下　晋子書

元禄七年十月十八日　於義仲寺

追善之俳諧

なきがら洗ふて温石さゝやかに　晋子

月花の外より来て海山ふ　支考

やゝ見ぬ馬士の極に来て居る　大竹

庵を捨て市の古木の長閑　惟然

洗ふ〳〵やゝ冷るゆふの秋　木節

森の名残ほのめく松風の歌　李由

之道

野風の菜の陽野ふ　玄来

ちの霧田中の水　曲翠

猿〳〵猿〳〵仮宅して　正秀

嘸笑ふさゝ古ぬ眉のちの思ひ　卧高

風雅の心ちを惜くる春　泥足

焦てなる沖の炭腐と世話ふる　乙州

本戸中を人を保ちの炭　芝柏

菖蒲ふ白ふ天氣合　昌房

車の佐ふて　探芝

澄月の積に流れぬ横雲川　胡故
たゝ〻りて所柔法をる　牝玄
菴の容をひめに逢ふ桜の雨　游刀
ぬるゝ人ゆゑ雨ふる春の聲　藤葉
世の花小集の盛りの惜まる　知月
多羅の芽立をれて育る　呑舟
此春を形〻うんゆる紫僧　土世方
折折に光る力荷作る　阜袋
四十中に前髪も卿なるひ　夫椿

苦にならるれ思ふん　野童
一夜ゆゑ未練を残せに花　素蟬
祭の笛ゆゑに鳴ゆる　万里
河風の只しの外に吹ぬり　識々
藪に河方りて蓮ゆる家　這華
塔雲ふるゆゑ　そりぬる池筒　許六
月の明りにけ立ふ紹　田元
秋ぬ山彼岸なる迄せハ年の外て　荒雀
今作る　芦に立一鶏　芦に立一鶏　建紅

小屏風の内より筆紙取出し
四つよりあり近き所なれば
無沙汰に筆すみて書つる
女人書して送りこれを見
ひたすら待給へ西京く
ゆるゆると書まられけり
お待ち兼ねる遊家の小神月利也
椀打へたる義のみ多
呑かゝれる世の朋とせまる

野明
風國
木枝
晋子
角上
之道
去来
土芳
芝柏

ゆるんを書て出しける
雪のにて特人の手紙をする
月さゝかゝ西門の井の垢甕
形の雪蓮ゆるる行きつ
聖方の朝ありなき空
花にとゝまる迎しまき張屋
春雨 弾ぬいぬ春の川馬
小撫ぶんに蓮迎よる 塀の上
洗濯に出る門屋りの石

臥高
尚白
昌房
丹野
丈竹
惟然
夫椿
正秀
四元

日に成りて葉の垂れも遠くなる
袋の猫のもの〳〵寂て鳴
里近く庭人をさそ冬の寺
ものやうやうに仏刻む音
七つ八つ京をともおさえ弁望
二重の石〳〵いまそ玉くの孤
門に拾る分むすのかくれけり
落山寺刈る草芝
十年を三分にうれ八月末を

朴吹
角上
沼足
尚白
卓袋
芝伯
探芝
游刀
楚江

角刀の地くれの〇て高岸
社僧の命十所立ちひ
訪〳〵とて代参を殿
汀渡に名山を引りけて
永毎と漢〳〵泣く啼(ナキ)虫
柳子家の柳よりめけて蓋下り
西氣の雲に尾やくく
立所〳〵醫師の薬清を
打叮玉すり畠ちんてん

魚光
晋子
風國
文寺
正秀
大竹
昌房
陸高
之道

名指の仕合ふるき名のそゝ
末後のそゝ仕合をゆるす
三ぎりのもゝはなく白くせて
産業のもゝかゆるゝ名
速や我らそのにて社の空
経のもゝちも無ふ変ぜう
ひろゝと花ゑを人に有れ来て
村より村へ行脚僧の種
嘆しなれふ縮のなれかゑん

去来
泥足
尚白
臭袋
角上
北玄
土芳
芝柏
這華

軍そのゝと独文のものゝ
渕川に薩埵の上を通る
明日にむそて念珠押もむ
我人乃若浮はん拾者を
えれてかえぬ大小の頭
味噌汁きゝ沙弥に力をあせる
かな蜂の何の可笑
そゝと恨をれさり
新赤ゝすゑ宿の辞

卧高
普子
正秀
支考
魚光
楚江
游刀
風國
之道

白象の徒を蒙塵に於せられ　探芝
二条殿のうちハ天下一之　春
仮志の門前も荒るゝの月　尚白
切者に機を見てとゝ好　四充
うゝ立き場格子乃窓明り　芝柏
文庫を切るゝ仮山伏　土芳
深雪を踏くゝ月の日の影　惟然
仮へも迫る武庫川の水　太竹
察に切る外より鎖を掛させて　北玄

思ひあ狀乃れくに成名　文考
青柳ちり深花の香ゝ　立乗
巣に生ゝらて千里雪　正秀

右四十三人満座真行大津脇所
京嵯峨橋津伊賀之連衆也各
感恐眉而不来巧言也

傷(ミテ)亡師の経(ヘ)歴(ヲ)一作(シル)句　初七日迫

忘れぬも十数の間うれ　京　玄素

啼うらの相(ヲ)氣をもせ深(ク)者　信　李由

学(ビ)や蘭も雪なともちうら　大津　木節

はなれ　宗祇もす白数の名　ロ　乙州

いるも間にあらや塚のもも　七　留房

晩の春もゆうやう千る雪　信　丈州

一ふしの琴の師とこん帰老　長崎　浮六

風よ雪なうらの舟よいひ　ロ　汶村

春をせかり十方なきよ　ハ　洒堂

牧庵に溜るなうや胡の雪　大津　楚江

雪岩は老の姿や若うも　ウ　威秀

本草柿や木の葉うきく塚の上　大津　俄々

日影すは塚にはるや　ロ　露玉

月雪にもの姿乃　信　千那

志ゆ猪に猟子あふ中新　大津　尚白

一ふうせ宮の絵ものもれ　奥羽塞
をもうてくうの号書をこ
はうてたそうをそうてを

なつかしやたましたる古人に物のあはれを動て
はるのあるかもなく紙塚を動て

三ぢうを写す嶋やまぶきの一枝　京　澂士

ちるを紙をのそしと春を惜　信　角上

法華の笠ゆてはん墓の雪　京　鶴童

一夜来て伝友に別れん鳴の声　口　風國

野に鳴る竜のそらまや夕時雨　イガ　士芳

紙しはたちたる時雨　日　阜袋

家の太鼓を伝る小妻の紡の声　大阪　無道

石たてて墓をたづく雪の跡　口　芝柏

庵の音を入る迄き抜る風　信　与考

入日やりんの鐘の朝朗　京　春泥

十六日晋子を幻住庵にかくるものして
蕉のかくまるといふる桂庵をこそ
いとすこやかに仏をまつる迷考

木かくれや何を日に咲こぶそ　曲翠

秋折て木ぶたにもむかれる　正秀

うつくしひ花きたる雪の跡　卵高

捨てこんこの分のこよる雪立　泥定

足遠ク高キ姿や神の名　霊椿
ものゝ〜も行ぬ岩の苔衣　晋子
ほろん仮もられ〜枯柳　サガ 垂明
浪華は独雲ゆ見る秋　ハ 茗荷
初ての鶴も帰や磯乃塚　ハ 呑舟
みな芭蕉衣にさゝて同こゝ郡　ヲ 麦光
立〜て秋ゆ〜や蓑乃花　ハ 田禾
悔れて蕎麦ゆ〜ゆ〜ゆ竜　ハ 游刀
雲消〜はれ雪ゆ〜ゆ山　ハ 朴吹

本号寺より出たる時分　大津 本枝
七月独泊をこたゝす出ぬれ　ヲ 遠華
連乃志れをきゝ〜ゆ乃窓　大津 土竜
都ゆ添ものき様乃ものゝ　ヲ 進尾
むら〜人にして足ゆ塚の名　ハ 伴走
ゆらゆて泊ゆ合す時ぬ　カ 女
二七日廟参ゆ悼句所〜交通
雪ゆれて徳の光ゆ〜ゆ山　岩茸
小舟〜房や あゝに白ひの様ゆ　尺草

冬ぜ日や師に寄そふもなくて
今ハ人や逃てさ枯る榊の枝
写遠てあハぬ命やもしれ
松の雲えぬ世の形やしの笠
しくしくしり落せん尼所市
第 櫻 時ん 乱 乃 地えび
朝ハうけて寄もすそ通塚の苔
おこして指ぬき物る洞こう仰
なるさえし琴も名ぬやえ月

大坂 如柿
北玄
吉我
松泉
翔巫
格瞻
京氏
素聲
万里

花色よせうれそ冬五
花桶のうえ逃しおまれ雲
冬の月徳にうみたるなるか
ふをたけハ京も陽とある洞
本光の月よ毛洞のしれる
力なく巻ふ時陽ふれ
冬榊ふれてふんりぬりり
枝れてものの弱やの竹の雲
白影へたてのふれや

業性
可南
徽房
麻之
砂よ
黄色
農新
東九
岳
困夕

幻にふるく枯野の樒哉　為有（サガ）

かなき物ゝのこゝろや冬籠　本康（ヒコヤス）

野ゝ宮や菊ぬれて雨しとゝ降　如行（ニヨカウ）

ゆゝしなれ時雨に濡れ雁に濡れ　小作（カサク）

ふるさとの小坊主のやゝ

ぬれ　作意伊丹

大根引あやまつて川中ぬれ　素水（ソスイ）

三七日伊賀連元追悼句

ふるさとやわらべ〳〵もゆゝしき年の夕　玄虎（イガ）

常夫の吟に八つゝ樒の邨　嵐雪

ぬれて雨声も庵ゝ枯野ゝゝ　風瞳

ゆゝ雨や雨ゝ〳〵佛の膳の鯛　山田孟雪

蕎麦ゝゝ帰て夜灯深時　松本花月

六畳に見ぬさまされなり月　墨水芝穂

芝塚や雨の外に雲乃義　柿雨（ヤウ）

火燈ゝゝ庵の秋深沢雨　一巻

なき塚や時雨てたつる古塚ゝ　作意雨水

ゆゝ何を拾ふる栗ゝゝ　西沢巴日

俳や是もさてはれぬ是史雄

名挑のなきを人きらぬ歌うの郎

心宗元の歌はるをぬるき深

備ゑ元百歳まを有うう九郎四

うろき子の果や本尾の吹とあり

うを世成　松葉に神のしるれ

雅家は小志ぼはに深し湖うれ

一生成義の仕事は湖あれ

菓れうう乃宗や湖の文の一四

はるの元　尾張

豊後和

本来　我峯

大坂や　万平

雅雖

小川風麦

横田宗峯

井つや　乃碎

深郎之

行るも湖に敬ぬ元蕎

菓れて例に小杉を湖きうう

たまりや風そかるる梅

松子に宗入ぬ峰　男麗れ

美を得る時ぬなるし小南

元のまに深を本命時郎

はるうてうう歌を山きし

歌は者もふるや元仙老

乃うう元遠つれや深の果

中尾梅年

小竜　長年

陳子蕎子

西宗来

井つや　元雄

宇西郎

大深仙秋

松氷園

門神九郎

なるほどの元師栗屋より入りて
三師の連書まんまり

義なれや法ゝるみやの村雨　羊張
手向ぬ人の本覚の神の下　西行百歳
法あれゝわが斗や敬ふ　満水
ほゝゝと問松ゆの芝の　素川島栗

・四七日を経て書音久通の句
信義の神のこゝろやり花　紙竹
義の法法ゝ　園友

まゝゝゝゝ思ひ出ぬ時雨哉　空芳
仮なゝ雲の消ゝ月雪　宗比
見て法や義の像に雪見　斗徒
むゝゝゝ世に分て本来　芝木
法ゝ会ゝゝ悲を雪雪　板不
当先てその法ゝけん時釜　庵牧
年の庭に名鶏帰之　霧川
板川や一羽新れて帰鶏　素覚
雲よりて光に入牡丹　左次

[illegible]塚の眼　冬鶯
明く時々の日新やかに　[illegible]　伽香
[illegible]　この俗耳
[illegible]　イヨ　黄山
[illegible]　つつ山　義光

十月廿五日共桃隣出武江而暨
義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

いつ[illegible]の風[illegible]の菊の葉の
[illegible]秋[illegible]春ふかう松ふかめ
笠よ眠り小蓑よ抱つつの浮世哉
[illegible]枯野よ[illegible]
一句も今之のうつるなぬ
共角ハちる望あるや生涯のたいめん

[illegible]とうなるあつうたり遠
境の人もいまさらなりや 江都より
さしをたもつあれとこうこる
席をかまへて追善無りのうさく
神よなりとひろひたりて仏さま
ぶらさをたれ乃大井もまぬ
[illegible]てあけて霜月七日のゆうつく往
[illegible]義仲寺の家上よひさまつ〳〵空華

[illegible]水月うつろふ心境一字
[illegible]ひろれハ万象をくうつす師
この[illegible]なのそうつうを利し他を
利して終に其仏不竭今もうつ
[illegible]
[illegible]仏にうく孫むすこ[illegible]

嵐雪拜

十月廿二日夜興行

十月をゆめからとそうり　桜花　嵐雪

たゝれの中より一筋の香　水花

盛のゝの二号ハ五ゝ　百里

立居をゝんゆる沖の船　神叙

ゝ明のゝゝよ白ゝ山　船　東潮

ゝゝ鶏さゝゝて豆まゝゝ　深生

蜀黍ハ実をゝゝられて畑中　卜宅

木蔭あゝゝまて土をぬる　舟竹

彩川ゝゝ蔭の行ゝ橋上　桐雨

西ゝゝゝゝゝ鳴ゝゝ　月下

春ゝゝ西をゝゝゆる田植ゝ　風洗

稽ゝばゝゝりと鳴る千鳥　桃市

線の茶の泡延して花ゝり　威宇

赤い菓ゝり黄ゝ菓を嗅　牧人

上氣して咲れる秋の風　高歌

あとあまくて床をとる月　銀釣

ちる花も笑ふたのしとはるうん　東潮

山吹もしらぬ顔をするれる　嵐雪書

まつ雨よあのやうなる迷ひして　浮生

氣あのまつ吹きあるるみえる　百里

只あるる四半の内の楽坊を　氷花

今享(クム)いとてなるもの　嵐雪

今望て指ふれ新まくり　神叙

徒歩のおれ内静まる　東湖

まつ寒き蓄書切れてまつる　百里

塚ぬ迫るる陰能まる　神叙

傘の外まきまる傘をあるる　嵐雪

物中夜あるまき母の氣を　氷花

あるる風吹巻のゆる冬の月　東湖

冬夜の雪ふ所をあるく　百里

年ふ年成冬ふ上大工ふ　神叙

中山道をかけてゆく　嵐雪

一件を来れば價のとかく　百里

さる代もあると沼の花　氷花

世変をまいりあつまる　墓の花　寺迹

世常の淫れをむさぼる　緑子

満座追善各焼香

なきゝ人の御ゆめ四季のたてやう　百里

うんぬきめれ蔡いつくるのれ　氷花

悔前非

永をつゝる恋しきもしれぬ月　神叡

苔しき人の寄もあれ塚の雪　浮生

風の外よあらしや墓の月　毎行

居りて松邦の寄れ根を流れ　咸宇

俳や二変三変よむ月明り　寺迹

れ苔や花をうき寄る潮うつる　東湖

いつあるも汚めぬ別れ　素イ

芭蕉翁みすぢぬるを行をたよりに旅だつ
人々とつれて行るる

秋風にたゝかれつゝ小鳥しも
哀れ芭蕉のあるこそ世中　安適

十月廿二日鳳来寺と逆旅を共の
ぶんも共に旅ぶりとなりぬ
とゝろをかもしよせて

佛やるよりを共にあるこの　桃隣
淋しさ山ゝの日の新　子珊

面影に郎花小松風吹て　松風
よるれしてゝを引安達　鶯水
名月を夕飯くるゝ　[illegible]
ゝゝゝ猛き　杉の帳子　序志
皇美よ枝をゝゝる影の声　太大
初立る入る吉槻の秋　泉水
心ゝゝ尽の信濃を惜ゝたる　孤屋
三里ゝゝ景乃塔　子祐

はしきあられの雪の降る空　利牛
木綿のまえまの世見る　白之
背戸ゆひ出てハ若く出恥し　野是
折角とれハ鯛のうら　孚里
やうやうと平泉まて来る九月　野坡
此幅せまきし布の為綿　杏落
真白な猿ハ流るゝ山所の花　八桑
綾のうちに遊あそぶる　桃川

そろそろと子供あつまりせて悲哉　利合
春をさかりて霞月の大原根　林子
酒呑ん平なりへたる笠の川　文梁
風呂敷とかて振鉢を出し　湖松
寄ぬ人をとうふ売ときに　桐奚
水井ぬるさを小利に住ム　嵐戈
丁寧に又桃村て送らるゝ　石菊
風なき雪の柳地につく　ちり

梅は[illegible]苦新[illegible]

嵐竹

白[illegible]梅の[illegible]

北筋

あ[illegible]と奢る月の宿

素龍

[illegible]の[illegible]

千門

[illegible]と葉[illegible]

楚舟

[illegible]雨[illegible]

角蕉

[illegible]

杏村

[illegible]

川路

[illegible]花燈

濁子

香[illegible]

滄波

[illegible]庭普音之吟

[illegible]

枝風

枯芝や[illegible]

八京

[illegible]

子珊

[illegible]

[illegible]の松

太大

[illegible]

松

菊れて白しを惜む居士哉　子祐
山茶花を掃はたのもしや樵夫　古猿
うき俤ちらでたえぬ茶花哉　席志
茶花を白しと思ふ雨の哉　亀子
人遠し茶花ばかりの夕哉　李里
骨肉よこゝろゆるすな冬の哉　越舟
茶花こえて蓮を居る哉　風弦
悲しひと白みのたる本葉哉　桃川

寺は茶花ばかりむらん牡丹　野ゝ
ちるれりや岩垣あるも苔の下　長好
初雪ぞ思ひしらるゝの哉　周陽
ちるみぞ霜降つゝ枯柿　春村
その影もちくやゝ雪の屋　石人
むせかるも苔の枯葉の焼きり　芝元
かゝへたる縄床さびし冬籠　浩波
独ぶれ寄無あるゝ仏頭哉　角蕉

義仲寺へ送る悼

[illegible]　法眼　李吟

[illegible]　露沾

[illegible]　山夕

錫杖よ[illegible]　直方

[illegible]　[illegible]

[illegible]　濁子

[illegible]　壺蛙

晴雨後白い卒都婆よ夕嵐　山逢

野[illegible]の白や十余[illegible]の[illegible]　涼葉

小菊や[illegible]　大舟

[illegible]人の面や十夜の[illegible]　尤柳

[illegible]　此筋

立され心を消る塚の[illegible]　千川

力竹引切れ[illegible]　潤泉

枯[illegible]　卜子

[illegible]　拙示
[illegible]　其井
[illegible]　佐鈴
[illegible]　蓬山
[illegible]　[illegible]
[illegible]　麻谷
[illegible]　[illegible]子
[illegible]　馬見

風の声よ檜原もすゑしらず　素龍

十月廿三日追善

亦白ちやあ　世ちの本紫檜　湖春

一枝に[illegible]しき[illegible]鳥　素龍
[illegible]綾なる日よ活ゆりて　嵐治
野ちの音ちちちち元山　岸ち
秋中ち[illegible]ち[illegible]の[illegible]　梅隆
音芋の芋を[illegible]ちち　徒水

内うちハあやまりうるる人つくし　地蔵
そうく雨ふれ来る四五町　孤屋
その形りよ紙て巻きる夏の雲　利牛
竈（クト）の火ハ〜て雲とたて巻　枳風
雲水の糸いろをう死所　素堂
坑とも舟ハ巻こ　華
山ふるよりしあつめ竹植て　利合
盆を行ふる急（キウ）ふ彼　地蔵

膳所の月汗漏もそる此海り　岱水
二くるいそあくうる秋　桃隣
花の葉者くすりて　押　英　枳風
酒といるれて　ゆしやくく　利牛
実ハうんてお下屋のみの夏屋敷　孤屋
ちくつれる雨の蚊帳　岱水
あいる河原ハ橋も芝ふる　桃隣
多作の撰の〜ぬ枕　園　利合

去る乃和備ゆ　力ゆ　野坡
家宝ふきの大なす　松風
弱ものなりける　信氏月　利牛
財布てぬふ洞ふ　孤屋
の俳の上ゆかるぬる配り　保　貸水
ふれう出れいふ　桃隣
山〻信濃の者ゆ　松風
本の通ゆ　蘭　等　用　野坡

ふい寿ゆ美しゆ　孤屋
小あゆをゆゆ　利牛
二三人俳勢上ゆ　の物ゆ　野坡
節句ゆ優ゆ　貸ゆ
神ゆ今俳のゆれゆ　桃隣
毛信美ゆる　の夕番　利合
十月廿三日晋子亭ゆ興行
今ゆも雪乃ゆ　仙化

かくぬるを雇て筆を略　是吉

みそれ月黒き　新鮫（トミ）て　介我

樹しのさせる階のうす　紫市

一もとの梅檀（イワキ）思れい二十夜　湖月

竜の嵐の宮を忘れ　祥牧

その命世の清の日をうばて　揚水

力もよハく祈ものの言　松凡

仙人を迎くたて　於霧の内　由之

崔の枝を繁はあるよ　全峯

ゆ原て雪木の屑ハ　作　紫徳

むらしきよりの　橋下の岩　李下

合羽をきるより　歌　祥紋

小傳よりしつく新（カヲ）　揚水

扇の白鷺　月の色　紫市

側のうとの乃　白しをれ　仙化

雨ふる時ハ　舟　揚子

ちいさき松の葉むしの入　李下
玉貝の草もゆるひて玉の色　湖月
日光樵夫似あり芳飯　紫幸
かゝる海ゐるを忘れ年の行　分我
手紙のおくハ名所利　祇叔
夜ねとらん寒入袋して　枳風
あゝさ蜂（キヒス）よ並一寸の花　湖月
暮れごと雪と蕪て猫ゐろう　介我

るを土戸にたゝむ　治徳
子ゐの所〳〵ゐまゐりり　仙化
生ゐ〳〵ゐて遊の人物　楊水
牛の月ゐ烏帽子の乳の道とく　市中
二りゐおそ蕪ゐ虫ゐ　全峯
竜ゐ〳〵朝の廉ゐ小菜　祇叔
つゐみて湯ゐゐ迎来　由之
肩癖の外ゐ法ゐきゐ見ゐ　仙化

はしりかゝに牛除る麦　介我

花子之も連歌枯地も花ゝ哥　沾徳

垣せぬ桃さへ人の数すゝし　湖月

深草の古墳に宗祇居士を讃して
いさすや友(トモ)風月ヲ家孫ニ狛ヲと芭蕉翁の
おもむきに似たり

旅ハ旅つゐに宗祇の時雨哉　素堂

落葉ふみし人や落葉の庭の人　沾徳

嫗宿よさき人見まく世頭なし　枳風

風よあらし渡せよ猿乃面　介我

月雪も近江の土やこせの縁　許吟

檜笠いつ迄を旅乃面なれ　湖月

風も身ニいや筝の汐めくわる　宗雪

あしくれ笠この外花かこひなし　暮子

花さ月根さし八旅ゝ世にあれ　拙侯

帰花菊ぬしもしれ翁なれ　園指

力竹とりこあしらり秋嵐　山峰

果てしなき芭蕉　寒玉
十四五の娘　秋色
雪ふるさ菊ぬ　和水
白の世や半月　芝蓮
さんくや雛の　一水
雛を雪に餅　星吉
強く名のよもぎ　椒也
雪に夜明思ふ　李下

宮に雪ふる梅　亀翁
青石の苔もあれや　横几
孫に野よ抜まゆ　京桃
又も来ぬ法の杖　岸水
ちるや膝とうえ　野波
行に寝て掛て　孤屋
油屋の消も悔　利年
すがり仏も枯る柳　蓮雨

[illegible]の廻り　合　伝水

[illegible]　石菊

月のさやかなりしを　利合

義仲寺より来る　亡師の塚のもとより紫沢

[illegible]とかたるも温雅の志よつゝ[illegible]

笠の面をひらもるりぬ[illegible]に遠里を陳

かゝ[illegible]の[illegible]

月[illegible]や[illegible]の菊や　七所　桃隣

十一月十二日初月忌

九山量阿弥亭興行

旅中に[illegible]菊ひゝらゝ酎(コヲ)[illegible]　嵐雪

白上[illegible]　桃隣

[illegible]の[illegible]を遊く[illegible]　岩翁

来[illegible]ゝ蔵の畳(カサ)ナリ　晋子

[illegible]に[illegible]ほ[illegible]　亀翁

[illegible]傘と[illegible]れて大[illegible]　樗儿

[illegible]に移植した一種の付　天州
形之[illegible]と廣き桐の葉　松籟
白粉の流にうつる秋のしも　去来
火燵かとんの引こまれ中　正秀
[illegible]紙の上にあいてる時ゝ　曲象
雛の[illegible]の[illegible]をたなびく　芋
[illegible]に屏風は膝を押直し　嶽士
鼓うくたしと大かりなり　心圭

の手ぬくと盃みそる人をし　暮面
[illegible]とせてあれん　巨海
[illegible]の長枝つくろふやうに　荷兮
湯あがりの[illegible]の浴る[illegible]　野童
[illegible]の[illegible]を窺ふ　風國
山家の不[illegible]乱[illegible]る　集加
柳[illegible]の[illegible]や[illegible]の傾　晋子
[illegible]用[illegible]家老の表　重勝

うゝ　我が和尚や笠田の庵住　遍照
　　塔寺樹よりあれし苔ハリ　瀧士
雨の日を大工もあそびしるゝ　桃隣
　　ほそ〳〵ちんとゝゝ降る日　嵐雪
のゝ松ゝ雨の間の下に雲ノ　横几
　　あゝてめさせよ　その蓮鍋　荷兮
ゝゝ色の金とゝ　ゝも極楽　玄蕃
　　上座ゝ聟を取ゝ遠合　尺牛

風ゝ雲もいと〳〵高のきゝゝる音　嵐雪
　　ゝもすゝたる庭保曲の月　岩翁
ゝゝこ風ゝ受戒の咒ゝの白素絹　瀧士
　　能とゝめとゝ使ゝゝ　晉子
あゝ腰の結ゝ出ゝゝる萩の月　集加
　　櫺子ゝ出ゝ主ゝ新ゝ月の夢　桃隣
秋風や着坊打のまゝ　ゝゝ　巨洲
　　衣桁のゝ小袖ゝゝ音もる　風雪

生のこる歯をゆらかして物思ふ　晋子
うれしかる沖の雲雨　尺州
老鶯よ招あるこゝろ清し新　芳卯
一日鶴を始め上る　心圭
きこゝろうゝぬ雲を赤よ見て　桃隣
夢の蝶ゆめ人ぬ　岩翁
よこれても柔てる枝こゝ　樗几
こゝやこれ鶏頭　巨海

牛糞居こゝして乃女子　尺州
乗ゐ弟て砕のこゝ月新　遊京
形角ゝ居ひゐ　撒士
年紙也ゐ　荷兮
肥肉ゐ　桜の樹枕　集加
梵天こゝ　川少屋　芳四
何も国を除て光る人　嵐雪
不思議よ嫁ゐ　去来

白粥のさもしく乃志い　異化　岩翁

すさまじもしろ雑人　音子

三宮四里撥婦酒せの旅人　郷童

悦ぶ〻〻手にめれあへり　瀧士

歌あり〻時ふる　こゆ〻音　風色

ものの法華を拍子とき　集加

湖を築（イケヲ）みなる　山の景　尺州

芋とり〻ぶ春の世の額　嵐雪

貴賤聊半もとる脇　桃隣

ぶ〻もの〻に客耕集　巨洲

かゝるの檜をうる　梅もとき　言四

こゝとの法ぬく組張　岩翁

ゐる〻葉（ワキ）嵐姫の立て　瀧士

拍子のあるぬ十念　集加

産〻や造もう〻男の子　音子

とり〻ぶ朝夕の酒　風色

節季のとしとあらそひぬる　横几

憐を俳方よりの発句会する　尺竹

所をうまれたる俳諧の人さう　桃隣

落花中よりなるうち　花日（本作キ）　苔四

見うるに日にのうせて五月の泪　心圭

うち暑よりあるとかこの景　元雪

無せしもあるよりあるやうに老うるか　蕉竹

うち門行うち仮の山路　玄蕉

来うたうまうて通う　枕舟　集加

地蔵を建て蓮の屋橋　音子

等の剥れうまうたうれて　岩翁

よううたうれすてあうう森　鼠士

天井を等うて雨うて蔵鞠　尺竹

うれ州也や里の蓑　物　蕉竹

秋月坊のうう出ハッかり　横几

暑を祈ううの服　掛　心圭

[illegible]たる新月　荒雲
[illegible]と毎月せやく　弥童
[illegible]の部乃沈[illegible]物　岩蔭
[illegible]風を[illegible]の竹　風公
[illegible]て赤版[illegible]る大井　夜　集加
[illegible]る百姓[illegible]　晋子
日[illegible]心さ[illegible]　[illegible]横寺　[illegible]士
[illegible]乃稲乃[illegible]

河風[illegible]　心素
新大橋乃富士　玄素
[illegible]や切干[illegible]尾張者　義[illegible]
もし[illegible]さ物の[illegible]質（カタキ）　重勝
和[illegible]琴[illegible]の[illegible]　桃隣
外[illegible]　横几

此一帖者於落柿舎書校合変

京都井筒屋重勝判

追加

於義仲寺、七日

花鳥よせうまれたるすゑ哉　惟然

菜の花や紙の売るまほらゝ　正秀

隅ゝよ雲行乃岩とゝ哉　卧高

明日乃天気ゆ弘亭を清ゝ　探芝

月新よ編抱んこむ梅ゝ　昌房

かしらにつまて梅ゝむしの名　游母

菊梅ゝこゝろ〻〻ゝ　丈艸

ゝ花乃弱よたのむ代哉　概子

角浮ゆ今にかゝぬ泉中風　朔故

ゝ雪り詩よ玉乃名物　上直愚

ゝ名世ゝ世ゝ稚ゝ雪さゝ　智月

老ゆ新ゝ秋ゝこの秋ゝ　惟然

恵ん伊寺て出乃川秋乃旅　正秀

新よ雨ゝい廉吹雪乃月　卧高

[illegible]より給はる具乃箱乃蓋あけて　昌房

葉ばかりにてとまれる梅の花　俊力

ちりぬるをかをよりしもの人とはゞ　丈竹

ほゝの樹よりひろひとれる　胡故

紙すよりはつれたるはゝ　直矢

芝居大敷乃桐のもとゝ　魚光

むつのしまき思ふ事ばかりを書　探芝

初見あつめてとしをとるところ　緞房

塚うゝに流れよりもれる家ほろび　川支

ゆく方なき船よりをばかりをり　丈竹

思月を流石の　ほゝよりをるゝ　乙列

秋はれ小雨よりまゝ深さ　曲翠

うれしうゝ流よりの下のようこう酒　卵高

秋の初はの朝ハ乃六のゝ事　藤葉

おなじ流を行せる道を行　牝玄

寄蘭よりとゝ乃の乃の毛　関西

五月雨　蛤ふる乃の四月　胡燕

ゝの乃ゝを三味線ひく　帷子

しりゝのゝ乃ゝに多ゝ乃門徒寺　這菜

ゐまぬうちハ伝ゐく鶏　朴吹

こゝろと故て仕ゐし花ゐ　曲象

むくゝあくる芝乃みゝ　昌房

ゐ仙満産計音之吟

肩うちまゐよ位ゐゝゐる　弟子大竹作戸

此悔や脇の緒切て今さ乃しも　荊口

ゐ乃蝶ゐときゝれぬゝれゝ　鉢頭

ゐを牡丹樽に係ゐ乃ゐ　五ゐ

燈消ゝく間に成ゐ乃ゐ　也風

簑虫も未に鳴れた居葉ゞ　秋書

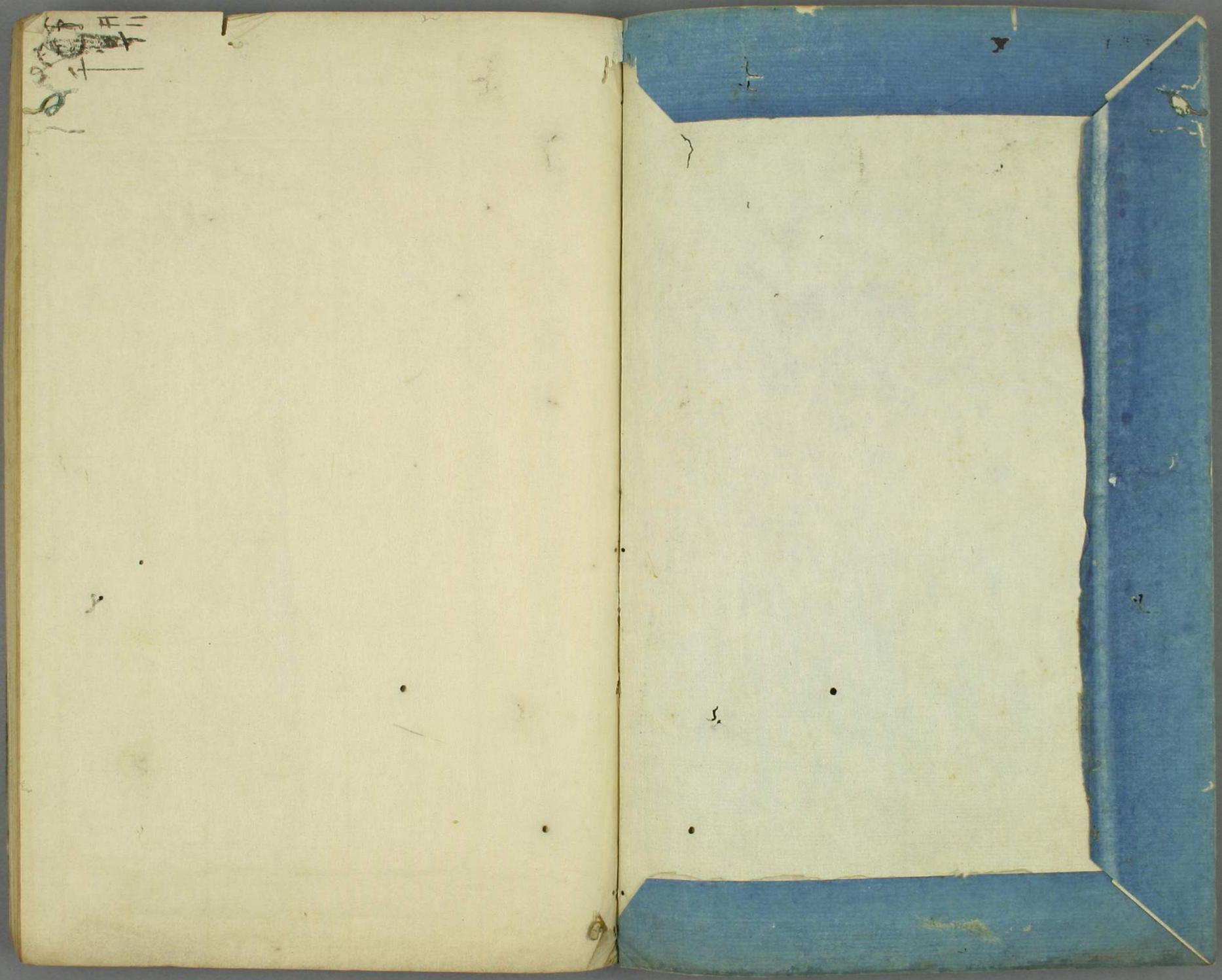
あゝ土乃墓もゝれや雨ゝら　胡風

草蘭乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ　黄逸

ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ　集迪

糸あけて初秋や人の逢　里未
法人を加減の逢ふ　野徑
雪霙いつを用ひとめこそ　藤葉
蓮花茎の枯て甲斐ある間ぐ　支遠
法ゆゑ俳句　竹窓
木くれに俳も走きよ　裾道
如石を為て法ゆ　尼教法
十方ゆき用や枯ゆ　柯山

月代を　塚乃木　及肩
七夕八ゆや雲ゆ　頭陀袋　旭校

霜月十六日芭蕉翁三十五日於
義仲寺奥行

墓迫く蓮乃香を持つ氷れ　桃濃
角てハあくゆ冬の葉の戸　智月
跡先ゆ庵ゆ危乃紅れて　正秀
四句目ゆ略之